現代語の終助詞「とも」の働き

The function of the final particle "Tomo" in modern Japanese

中野伸彦

NAKANO Nobuhiko

(Received September 28, 2012)

一

先に、現代語の終助詞「とも」が使えるための先行文脈について述べた。[1] そこでは、「とも」の働きについても若干言及したが、「「間違いのなさ」「確かさ」を言っている」のように述べるにとどまっている。本稿では、それに続き、「とも」の働きについて考えていきたいと思う。

二

たとえば、次のような「とも」の用例がある。「歴然としている」「まぎれもない真実だ」ということばが続いていることに表れているように、話し手は、「とも」の上に述べられている内容を、疑うべからざる確実なものとして主張していると考えられる。

1「結論があるんですか?」ハドリーは尋ねた。
「あるとも。それは歴然としている」(死が 175・2)[2]

2「これが事実でしょう、博士。ちがいますか?」
フェル博士の顔は真剣だった。
(略)
「そうとも、それがまぎれもない真実だ」(死が 234・10)

このような「とも」については、「意向を問われたり、同意を求められたりした場合、確信をもって自己の判断を主張することを示す」[3]、「話し手自身の判断などに対する強い確信の気持ちを表わす」[4]などと言われる通り、上接の文で述べている内容について「間違いなく事実である」という話し手の思いを表す働きを有していると考えられる。

しかし、「とも」の働きとして、右のようなもののみを考えておけばいいわけでなない。

「推量その他、不確実な判断を表わす助動詞にはつかない。「とも」の表わす意味によるものとみてよい」[5]と言われるように、「とも」の前に、「ようだ」「らしい」のような推量の助動詞が来ることは、一般にはないであろう。しかし、「「にちがいない」や「だろう」のような認識のモダリティの形式に接続することもできるが、「かもしれない」や「らしい」には接続しにくい」[6]と言われる通り、「だろう」に「とも」の下接した「だろうとも」の形は少なからず見出される。

3 まもなく僕は、昨夜ロード・サイモンが帰った後でビーフ巡査部長がウィリアムズと僕にした奇妙な質問のことを話していた。巡査部長がどんな目的だったのか、僕には理解できないと言った。

「君には警察のやることなど私ほど理解できないさ」ロード・サイモンがくすくす笑った。

「でも、巡査部長は犯人が誰なのかかなり自信があるようでした」

「むろん、そうだろうとも。そうでなくてはならないんだ。警察はいつでも確信を持っているものなのだ。ただし、間違っていることが証明されるまでだがね」（三人 178・4）

この場合の「とも」は1・2の例とは違い、「間違いなく事実である」という、事実性の高さに関する意味を表しているのではなく（たとえば、「そうだろうとも」の後に、「それは間違いなく事実だ」をつなげるのは不自然である）、「（直接知らなくても）考えればそうなるはずのところであることは間違いない」という、上接の文で述べている内容についての蓋然性の高さを表している。「巡査部長は犯人が誰なのかかなり自信があるようでした」という聞き手の話を聞いた話し手が、その場に居合わせず、直接見てはいないものの、「警察はいつでも確信を持っている」ことから考えればそうなるはずのところであることは間違いないということを述べている。

「だろうとも」の形においては、11のような、本当にそう思っているわけではないが、皮肉っぽく言う例や、12のような、確かなところを知っている聞き手に確認を求める確認要求の例なども含めて、「（直接知らなくても）考えればそうなるはずのところであることは間違いない」ということが「とも」によって述べられていると思われる。（自分に関する仮定の事態に対する推量を述べる13の例のように、話し手がかなりよく知っている事柄であれば、「それは間違いなく事実だ」をつなげるもできる。この場合は、二つの意味をかねていると考えられる。）

4「その刑はだれの責任にもとづいて決定されたのだ？」

「判決はカラビニエーレ地区本部によって承認された」

「むろんそうだろうとも。だが、判決をくだしたのは？」（捕虜 195・15）

5ご主人はたいへん深刻な病状です。自殺すると言ったりしませんか？

ええ、言うんです、と言って彼女は泣き出した。だけど本気じゃありません。もちろんそうでしょうとも。要するに安静の問題なのです、とサー・ウィリアムは言った。（ダロウェイ 174・1）

6 映像の中では、鍵を受け取ったメンバーがそれぞれ見取図を確認し、建物の奥へと消えていく。最初に海藤が。杉村、山西、瀬之上、勝田、鴻巣の順で。ロビーにはそして誰もいなくなった。無人の映像が少しの間続いて、そしてカット。

暗闇の中で、ナレーション。

『事件は、この後に起こる』

「そうだろうとも」

とは里志の弁。（愚者 46・11）

7「で、君はカトリーヌを殺したというが、一体どういうことなんだね？」

「殺す積りはなかったんです」

「勿論、そうだろうとも」（曽我 148上2）

8「さすがですよ、刑事さん。やはり、これは罠だったんですね。ひょっとしてそうじゃないかと警戒しながら、結局、網に引っかかってしまいましたよ」

「ははあ！　そうでしょうとも。この罠はわたしが康子夫人の協力を得て仕掛けたものです。（略）」（館 291・15）

9「安良さんは信じているように見えなかった、と式部さんが言ったんじゃないですか。実際、そうでしょうとも。本家の人たち、分家の人たち、宮司さんたち――いずれにしても祭祀の真ん中にいるわけでしょう？　かえってこれは信仰にすぎないってことを誰よりも分かっていて当然なんじゃないですか。本家のお屋敷には馬頭さんが棲むという社まであるわけでしょ

う。そこが空であることを一番良く知ってるのは神領家の人たちじゃないですか」（黒祠　304・5）

10「（略）それに大体、あなたには玉美の魅力が解らないだろうが！」

「そりゃあ、まあ……」堂本は怯んでしまった照れ隠しに、鼻の頭を掻きながら答えた。「解りませんがね」

「そうだろう。そうだろうとも――。玉美には君たちには想像もできないだろう、素晴らしい魅力があったんだ」（QED　454・2）

11「チャーリー、チャーリー！　おれは潔白だぞ。ウェストチェスター郡に住んで、毎日曜日には教会へ行っている」

「そうだろうとも、ニック。だから、きのうセントラル・パークで前科者と一緒に昼めしを食ってたんだな」

「おれを尾行してるのか？」ニックは驚きの表情を見せた。（怪盗　384・13）

12　**フランシス卿**　すると、きみはどうしても心霊現象を信じないと言われるのか？

フェル博士　信じる、信じない、どちらともわしは言っとらんよ。

フランシス卿　じゃあ、きみの良心はどこにある。（苦々しげに）この現象を憎むもよい、嘲笑するもよい、論駁するもよい。だが、無関心な態度だけはとってほしくないものだ。（語調を変えて）そりゃ、わたしだってわからんわけじゃないとも。このわたしにしてからが、かつては懐疑論者だったのだからな。（略）事実、こう書いたこともある――〝来世という言葉は、興醒め、という言葉に似た響きを持っている〟とね。さだめし、きみもそう思っているんだろうとも。（ヴァンパイア　42・8）

13「なぜ嘘をついたかといえば、あなたに真実を信じてもらえるかどうか、わからなかったからです。たぶんだいじょうぶとは思ったが、自信がなかった。わたしは危険はおかすわけにいかなかったのです。申しわけない」

「真実なら、あたしは信じたでしょうとも！　あなたがよこしたたわごとより、ずっとすじが通ったでしょうからね！（略）」（順列　上279・13）

「ほかにそういう仮説があるという文脈で、当然のこととして強調するという機能を持つ」[7]、「もちろんそうだと、強く断定する気持ちを表す」[8]のように、「当然」「もちろん」といった意味を持つものとして「とも」の働きが説明されることがあるが、それはこのような例に適合するものであろう。

同じ、「だろう」を文末に持つ場合でも、次の例のように、「（直接知らなくても）考えればそうなるはずのところであることは間違いない」ものとして述べているのでない場合は「とも」はつけられず、次の「ね」を「とも」には変えにくい。

14「悪魔的な力を持つファントムなら、アパート中の窓を割るような、そんな大がかりなことをしなくても、タルマッジ一人を殺せたのではないでしょうか」

彼は言った。

「そうでしょうね、私は知らないわ」（摩天楼　95・6）

三

前節では、「だろう」に下接する場合に「とも」が表しているのは、上接の文で述べている内容に関する「（直接知らなくても）考えればそうなるはずのところである」という蓋然性の高さの主張であることを述べた。では、「だろう」をともなわない文に「とも」が下接する場合はどうだろうか。

上接の文で述べている内容について「間違いなく事実だ」という意味で使われることがあるのは、1・2の例をみても明らかであろうが、「だろう」をともなわない文においても、「だろうとも」と同様、「（直接知らなくても）考えればそうなるはずのところであることは間違いない」という意味を表していると考えられる例もある。

15「一時間以上遅れている。社家君は帰ってしまっただろうな」
「どうして？」
「どうしてって、いつになったら霧が晴れるか判らない状態だったじゃないか。場合によっては着陸する空港が変更になっていたかも知れない」
「大丈夫、社家さんなら、一日でも二日でも待っていますよ」
「そうかな」
「そうですとも。社家さんが出迎えに来るのは、あなたなら別ですけど、あなたの鞄なんでしょう」
「……それは、そうだ」（曽我　347下1）

15の例は、飛行機の着陸が霧のせいで遅れているが、大金を出して買ったもの（＝「鞄」の中身）を聞き手が運んでくるのを待っているのだから、社家氏は「一日でも二日でも待ってい」るはずに間違いないという意味を含んで「そうですとも」と言われているものであろう。

16「そう。僕の眼力は素晴らしい。このホールの中に、この夜を楽しくすることができる、魔法使いがいらっしゃるのを見抜きました」
「判った」
「君にも判りますか」
「判りますとも。その魔法使いはわたし。ここでわたしがバレエを踊り、皆様にご覧に入れようというのでしょう」（曽我　117下22）

16の例も、自分がその当人であると考えられる以上、「判」るはずのところのものであることは間違いないという意味合いで言われている。

以下、同様な例である。（18・19の例は、話し手が直接知っていることを述べているが、「考えればそうなるはずのところであることは間違いない」という意味（特に、直接知らない聞き手にとっても察しがつくだろうという意味合い）で言われているものである。）

17　駅ビルの中にあるトモエヤの出店でからすみを三箱、隣のデパートで鮎政宗の一升瓶を二本買ってから宿に向かった。宿に着くと山本アユミが玄関に迎え出た。
「よくここがわかったね、重かったでしょ持つ持つ」と言いながら鮎政宗とからすみをわたしの手からもぎ取るようにした。
「半分払ってよ」と言うと、
「世をはかなんで旅に出た友にそんなこと言うのかおまえ」と悲しげな声を出すので、
「言うともさ、トモエヤのからすみは高いからね」と堂々と答えてやった。（椰子　29・4）

18「でも、そんな奇妙な指示をされて奥さま、ご主人に何もおっしゃらなかったのですか？ すんなりと従われたのですか？」
「そりゃそうですとも。あのひとはずっと、そういうスタイルで押し通してきた人間ですもの（略）」（幻惑　323・6）

19「さっき言ったように、簡単な新年会を翌日やるつもりだというので、それなら準備をしておかなければと言いますと、主人は、自分がやるからおまえは何もしなくていい、ただ、明日は午後までどこかへ出かけていてくれ、と……確かに、そう言っていたのですが」
「変に思われませんでしたか？」
「もちろん思いましたとも。（略）あのひとがそんな殊勝なことを言ったのは初めてだったんじゃないかしら、（略）」（幻惑　325・8）

ここで問題になるのは、この二つの意味の一方を表せばいいのか、ということである。

20「お散歩ですの？」
ナツメは、真っ赤になって、もごもごと口ごもっている。
「よい天気ですものね」キャスリーン嬢が空を見上げて言っ

た。

「よい天気です。まったくよい天気ですとも！」

ナツメは、今度はいやに勢い込んで相槌を打った。（吾輩　160・9）

21「ヒッチコック作品では、どのあたりが好きですか？」

「初期の一部を除けばすべて観ていると思います。（略）」

「何年のお生まれですか？」

「一九四七年です。だから、封切りと同時に観ることができたものは『鳥』からです。（略）それから『マーニー』、『引き裂かれたカーテン』、『トパーズ』、『フレンジー』、ずっと封切りと同時に観ました。あの監督の熱心なファンでしたから」

「それが最後ですか？」

（略）

「最後って？」

「『フレンジー』が最後ですか？」

「ああそうです。そうですとも。あれが最後です」

彼は確信をもって答えた。（ネジ　14・15）

22「（略）ほかに証人はいないのか、ときみは訊くだろうな」

「その種のことは、私の本分ではありません」ウインターがきつい口調で応じた。

「だが知りたいだろう？　ああ、一人いるとも。いとこのアーチー・エリオットだ」（ストップ　114・18）

20～22のように、「間違いなく事実である」という意味を表しているとは考えられるが、「（直接知らなくても）考えればそうなるはずのところであることは間違いない」という意味を表しているとは考えられない例があるので[9]、「間違いなく事実である」という意味のみを表すことがあるのは確かだが、逆のケースはあるだろうか。

「だろう」のような推量の助動詞をともなっていない形が、必ずしも「断定」を表すのでないことは、既に指摘されている通りで[10]、たとえば、23の「何とか大丈夫だよ」は、少なくとも「体が大丈夫であることは間違いなく事実である」というほど強く確言しているものではない。したがって、「間違いなく事実である」という意味を表しているとは考えられないが、「（直接知らなくても）考えればそうなるはずのところであることは間違いない」という意味は表していると考えられる、「だろう」をともなわない「とも」の例があってもよさそうに思われる。

23「……体は大丈夫ですか」

と、ためらうような感じで、質問が返ってきた。

「ああ、まだひどく痛むけれど、何とか大丈夫だよ。それより、君が、僕の手当をしてくれたのかい」（悪魔　265・3）

しかし、集めた用例を見る限り、該当する例はないようである。次は確認要求の例ではあるが（イッギーに、自分に不利な証言をされたローズ氏のイッギーへの発言。それに先立つ、「人のことをそんなふうにしゃべり歩くんじゃない。分かったか？」という、イッギーの父であるコヴァック氏の、イッギーをさとす発言をうけてのものである）、続けて「お前と小父さんは前よりおたがいによく理解しあえるようになった」と言っているように、「分かっている」ことは「疑うべからざるものである」として言っていると考えられる（同じ確認要求でも、先に挙げた「だろうとも」の12の例とは違っている）。

24「嘘なんかつかないやい！」彼は父親のシャツをつかんで引っぱりながら、必死にいった。「本当だよ、父さん、二人ともちゃんと見たんだ。神様に誓ってもいい、本当だよ、父さん」

コヴァック氏は息子を見てから、まわりの連中を見まわした。

（略）イッギーが彼のシャツを引っぱって、見たんだ、見たんだ、嘘じゃないと叫んでいたが、コヴァック氏はその息子を激しく一度ゆすぶった。イッギーは黙った。

「イッギー！」コヴァック氏はいった。「人のことをそんなふうにしゃべり歩くんじゃない。分かったか？」

（略）

「坊や、父さんのいうことを聞いたろ？」ローズ氏はいった。

イッギーはそれでも何もいわなかった。

「分かってるともな。これで、お前と小父さんは前よりおたがいによく理解しあえるようになった。悪い後味は残さないようにしような。（略）」（九時から　210・5）

前に挙げた15の例も、推測を述べているものであるが、それが事実であることの確信の度は高い。

四

最後に、「とも」の接続について触れておく。「とも」は、「活用語の終止形に付く」[11]、「終止形に付く」[12]など、（活用語の）終止形につくとされていることが多い。これに加えて、副詞「そう」を挙げるもの[13]、副詞「そう」・形容動詞の語幹を挙げるもの[14]、「形容動詞の語幹や副詞」を挙げるもの[15]もあるが（単に「文に相当する語句」とするものもある）[16]、名詞に直接つくことについてははっきり触れられていない[17]。中には、「名詞述語に接続するときは、「だ」を介して付加される」[18]と「だ」が必須であると述べているものもある。しかし、名詞に直接「とも」がついた例は、

25●坊は能子だ「ヲ、〳〵、能お子とも」（浮世風呂　日本古典文学大系　165・13）

26雅な柱かくしをかつて来たが、何よめぬ字がかいてある。来てよんで見てくりやれ。へナンダ。唐様かな　へヲ、サ。からやうとも〳〵。（鯛の味噌津　噺本大系第十一巻　195下18）

27へコレ〳〵ごん介どん。酒屋のつかひか　へヲ、さかやとも〳〵。此とほりとくりをさげている（百歌撰　噺本大系第十八巻　252下8）

のように、江戸語にも用例があり[19]、現代語の例としてよいかはためらわれるところもあるが、次のような例もある。

28「侍、え？　りゃん的かい？　大屋さん。ありがてえなァどうも。侍になると、なんでしょうねェ、出世てんでしょうねェ」

「ああ、出世とも。この上ない出世だ」[20]（圓生　上36・12）

一応現代でも使う形ではないだろうか。

また、他に、肯定の感動詞「ああ」「おう（おお）」についた例も見られる。

29「（略）〈対ロシア自由戦線〉って知ってる……」

「ああとも。警護をつけてもらったうえで何度かネゴシエートしたこともある。生命監査の受け入れをお願いしにね。（略）」（ハーモニー　310・15）

30「〈自由戦線〉とのチャンネルはまだ維持してる……」

（略）

「ああとも。それが目下、俺の仕事だからな」

「接触したいの、それも今すぐ」（ハーモニー　311・15）

31「（略）でも、俺に云わせりゃ、ありゃ人助けだ」

「人助け――？」

「おうとも、人助けさ」（過ぎ行く　435・18）

32「（略）嫁はおっかなびっくりそうっと襖を開けてみると――」

「――そ、そこに出た、んですか」

「おうともよ。仏壇の前にな、誰か座ってやがるんだ（略）」（占い師　234・13）

33「（略）それに、あの森にあるのは食糧だけではないのです。金もあります」

「金？　金とな？」

「おおとも、さようで。これも一つの風聞ではございますが、信じるべきはこちら側、われわれにとって都合のよい側では？　森林には錬金術の達人がごまんといて、わんさか金が採れるそうです」（アラビア　II 37・7）

意味としては、平叙文に下接する場合と同じく、この感動詞で肯定される内容が、「間違いなく事実である」あるいは「（直接知らな

くても）考えればそうなるはずのところであることは間違いない」ということを表すものである。古い用例は見出していないので、比較的新しい用法であると思われる。[21]

五

以上、「だろう」をともなう文とそうでない文で表れかたは異なるが、「とも」は、上接の文で述べている内容について、「間違いなく事実である」という事実性の高さ、または、「（直接知らなくても）考えればそうなるはずのところであることは間違いない」という蓋然性の高さを述べるものであるということを述べてきた。「とも」のあらわす「間違いのなさ」「確かさ」は、この二つをあわせたものとしてあると考えられる。

[注]

（1）拙稿「現代語の終助詞「とも」―必要とされる先行文脈について―」（『築島裕博士傘寿記念国語学論集』、汲古書店、二〇〇五）

（2）現代語の資料からの引用にあたっては、書名（略称）、頁数、行数をこの順で記す。用いた資料については、論文の末尾にまとめて記してある。なお、引用に当たって、ふりがなは省略したところがある。

（3）松井栄一編『小学館日本語新辞典』初版、小学館、二〇〇五

（4）松村明編『日本文法大辞典』、明治書院、一九七一　568頁

（5）（4）に同じ。

（6）日本語記述文法研究会編『現代日本語文法4　第8部モダリティ』くろしお出版、二〇〇三　268頁。ただし、「にちがいないとも」の用例は見出していない。

（7）森山卓郎「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」（『日本語の文法3　モダリティ』岩波書店、二〇〇〇）35頁

（8）北原保雄編『明鏡国語辞典』第二版、大修館書店、二〇一〇

（9）これについては、（1）に挙げた拙稿でも触れたところがある。

（10）田野村忠温「文における判断をめぐって」（『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂、一九九〇）

（11）（8）に同じ。

（12）西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編『岩波国語辞典』第七版、岩波書店、二〇〇九

（13）（4）に同じ。

（14）松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』、學燈社、一九六九　661頁（ただし、形容動詞の語幹については「近世の特例」としている）

（15）山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』、明治書院、二〇〇一　538頁

（16）『研究資料日本文法　第7巻　助辞編（三）助詞・助動詞辞典』明治書院、一九八五では、「活用語の終止形に付く」とした上で、「まれに命令形に付くことがある」（243頁）としている。近代の用例としては、

「叔母さん、ぢや此屏風は頂戴して行きませう」と云つた。

「あゝ々々、御持ちなさいとも。何なら使（つかひ）に持たせて上げませう」（夏目漱石　門　『漱石全集　第六巻』岩波書店、一九九四　401・10）

のように、命令形についた例もあるが、現代語としては用いられなくなった形であろう

（17）『日本国語大辞典』第二版、小学館、二〇〇〇～二〇〇二

（18）（6）に同じ。

（19）湯澤幸吉郎『増訂江戸言葉の研究』、明治書院、一九五七では、「活用語の終止形に付くのが普通であるが、また左例のように、副詞・形容動詞の語幹に付くことがある。」（668頁）と述べられ

ていて、名詞につく例については言及がない。

(20) ただし、名詞に限らず、副詞や形容動詞の語幹も含め、「だ」を介さずに非活用語に直接「とも」がついた用例は、現代では、2の例のような「そうとも」の形以外は見つけがたいものではある。

(21) 三好十郎の『おりき』(昭和十九年)の中に、次のような例があるが、「八ケ嶽の、雄大な裾野の一角」に住む少年のせりふである。

少年 そんで、一人前になったら、道雄おじさんを、やった奴を、おら、じようぶ、やって来るぞ！

百姓 どうだかな。

少年 ああとも！ やれら！

百姓 ほんまに、やって来るか？(『三好十郎の仕事 第二巻』學藝書林、一九六八 407下23)

[現代語の資料]

本稿で用いた現代語の資料は次の通り。傍線が引用に当たって記した略称である。

ジョン・ディクスン・カー(仁賀克雄訳)『死が二人をわかつまで』(国書刊行会)、レオ・ブルース(小林晋訳)『三人の名探偵のための事件』(新樹社)、マイケル・ギルバート(石田善彦訳)『捕虜収容所の死』(創元推理文庫)、ヴァージニア・ウルフ(丹治愛訳)『ダロウェイ夫人』(集英社文庫)、米澤穂信『愚者のエンドロール』(角川文庫)、泡坂妻夫『奇術探偵曾我佳城全集』(講談社)、東川篤哉『館島』(創元推理文庫)、小野不由美『黒祠の島』(祥伝社文庫)、高田崇史『QED 百人一首の呪』(講談社文庫)、エドワード・D・ホック(木村二郎訳)『怪盗ニック対女怪盗カサンドラ』(ハヤカワ文庫)、ジョン・ディクスン・カー(大村美根子・高見浩・深町眞理子訳)『ヴァンパイアの塔』(創元推理文庫)、グレッグ・イーガン(山岸真訳)『順列都市』(ハヤカワ文庫)、島田荘司『摩天楼の怪人』(創元推理文庫)、川上弘美『椰子・椰子』(新潮文庫)、西澤保彦『幻惑密室』(講談社文庫)、柳広司『吾輩はシャーロック・ホームズである』(角川文庫)、島田荘司『ネジ式ザゼツキー』(講談社文庫)、マイクル・イネス(富塚由美訳)『ストップ・プレス』(国書刊行会)、二階堂黎人『悪魔のラビリンス』(講談社文庫)、スタンリイ・エリン(小笠原豊樹他訳)『九時から五時までの男』、三遊亭圓生『古典落語圓生集』(ちくま文庫)、伊藤計劃『ハーモニー』(ハヤカワ文庫)、倉知淳『過ぎ行く風はみどり色』(創元推理文庫)、倉知淳『占い師はお昼寝中』(創元推理文庫)、古川日出男『アラビアの夜の種族』(角川文庫)